関ヶ原軍記

二編 九 十

へ遠13特
2207
20

へ遠13
帙 2207
巻 20

凡士農工商共に其職業を固て相用の器物を造る
今日を営む夏世農一般に然り紙に世字本の巻中小郡ら面縁
ほのぎ)に種々の書人又は形さ賞玩うるき木偶人戯見世
男女の陰陽を画き君臣父子の中々面と素め合事
同く気一足番ハ必竟一時の興より案じての戯をかうんら俳
其職分に道具へ応付ものハ俳ちるり著述撰作業者の作り
ほのぐも只言語とはく其通ちて名勢巻中の戯画楽書作り絵
池田屋常次郎氏を歎賞然る事深く関て素代て諸君子游ふるの爾

和漢 貸本所 東京牛込細工町 誠光堂 池田屋清吉

廣石山人識

池清

関ヶ原軍記武編巻之九

目録

一 神君 鴻田治部清長伊達家へ御使者の事
并 政宗関東御味方変定の事
一 関東乃大軍尾州清洲に志陣村
城茂助 上使の事

并後臺高虎御請村数名誉の事

本牛 池清

関ヶ原軍記武篇巻之九

神君　鴻恩治乎蒙て伊達
家へ御使者の事
并政宗関東御味方変定の事
曰く此度伊達陸奥守政宗へ仰付
鴻恩治乎蒙
あつく
仕下知の趣き
内府公へ御

表へ御陣場の為に新しく大軍既に美濃へ發向福束高橋の高橋城攻落して尾州清洲の城を集むる故時宜来りて御使者村越茂助 初名三十郎 清洲へ引急して信大名越前守氏村越を無の辛忽の内府公の御忠恩を忘れ

信大名破年此城責軍評定これある時の論に本多忠勝 松平康政 唱之既年大名年分れ城攻の手部り行り是より前方石岡三郡大垣の城へ入上方勢退く来りく既手指七万余人と及ぶ

元亡二回くく凡そ兵地用ゆる

中に農業ばかり日用
又新のごとく新る田畑耕作
のみに倫へ手人牛のごとく
なれば牛馬鄉鍬鎌多く
あるこ養或ひいち地手意
じて肥よりなしまて
物種地用こと出る事人陽と
いとを苦くること出なん

そ時ゝ代こと有り田畝返
はる牛こと牛の人代なるこ
い馬なり又畑けまもく
入るこ元こ麦田を耕まん
鋤今ば一町苗を返まん百人
鍬りて汗ゝ牛ゝ鍬ゝ手
牛一疋ゝ起きに叶はば
き田の苗と百ゝ熊手

なくているべき所皆
郡の如し 地頭今のとうり
田畑をもつて持つる人も
せよ 耕作人と百姓とて
いかゝ尽くべし 京何方ぐ
大名の侍ひと持つるも
大名なる人 それ〳〵ふ仕
尽きやうを知べきなれば何の

被
被夫〳〵の被りて
あるべきなり 何事も
百姓の家〳〵に被ゆる物
なり 犬 猫 猫人と好メ猫
嵐を防ぎ 牛馬耕作を助事
荷物をうつぶ又 書 書
肥しよ物 或ひは泥をすて
つて溝の中 大穀に掛ひ

百日の間一日も毛をとらむ
鶏い耕作のうづれ来たと拾ひ
毛をとる屋で田畑の出来る
まで老人を種地下しく
夏降る時蓮荒を綴る女
を田の件と有り綿の事
間を吹をえ入穀のうちの
陽なる時を本綿を獄子使い

米を刈一人にても役と
いふいるを外接貢
唖聾くるまぐくなる
役目ひり御れば戦の大将
も又左のごとく雑なるの
事へんの武士にも用ひ
るゝぬいるを意之
東照文を人地考ひるゆ

神物語猫の　御名物
ゝゝ此人有ゝ毛皮其形氣
ふ順じて百仕ひ殺ふ仕使
書院或給人の内皆ゝ武辺
の達人斗り集るゆ流儀
ゝ家ゝ作目ゝ偉義にて
養ゝゝ芸ゝ見詞かれまして
私し此猫異なる一風有て

軍此物語り抜まらんぐ
の人ゝ此仕書の内ゝ
抜て村城成敗の日本一ゝ
幸忠人まして奇妙ゝ
愛ものゝ名を異る時ゝ
首字を忘まらい表遠へ
あらひい食るを生る年
阪梶汁梶を絞ゝ考探ゝ

きさの小袖のうらおもてを
元遠くるるまで第車以ての
命く幸忍り元の名を
三十席とりつけなげある
時　来照文御鷹うま
御ぢが名をるあとややと
御寿を有しまし矢念して
出ぢいろくと工夫し

れ芸月ぢの名源あ武
形長堀尾常刀立上りる
年ての常刀ぢ義事此時
の名を風ひ名ひいぢして
義物と中仏と堀尾ぢ名を
元くりて工うり
来照文御ひあつく三
十席ぢ知っていむぎと立

とり組し人の名を奪ひ作せられて
曲者なりそ
以来生方い義物と名をつべ
しとて
必ずば失念さべうらぶと
相せられより後く材木義物
といふ物のごく無息の
人なれども世使妻庶の内よ

新れうも出沢ちり
ケ程の者い何ほう加えべき
とおもひしそうそうに此交
の世使者い大きそ尾よく
勤めとりそ皆人感じる
とあり

去程に
徳川内大臣家康公を江戸表に

御馬入の義別大侍の様子伺
達ゟ相政宗方へ伺使者あり
時田源兵衛（氏人片目ゟ来て政宗のおにあり）彼地へ城
ゟ来る〳〵相政宗ハ奥羽ゟ
弓矢大ひ平輝宗父を輝宗と
いゝ父子ゟ大膏
別して自力ゟ立身し孫ゟ
古指金百石領一二年相城

終して勅ゟ内ゟ
東照宮の御智謀感じ奉り
常〳〵伺入寵〳〵出入し奉り
その政宗の先祖ゟ山陰中納言
代後乱ゟ
成綱ゟ伊達定綱の孫伯耆
庶子ゟ孫信ゟ家ゟ
ゟいゟ何ゟゟ久し

家康利
去ぬる六月十四日大坂立
上杉が所領を隆信行光博
ゆきつり相馬へ
移く下着して七月廿三日伊豆
の大海をこえ豆州郡村
出陳して廿四日平の芦田郡
白石の城に立張先手を行食

後中責撰り始終弓矢手柄の
るゝ良将也強る手出段為田
沿岸を以て御口上上方
勢出筋を石田三成が逆心を仍
く隠紀き由　家康上洛
成して逆徒を退討きべき也
政宗も石田方に与力せらるん
も伝聞手強者こゝ久敬

内入魂有順之の為使者を以て
申入るゝ事なるのつゝ之を
内府公の御意にて御口上
述る仕方まで其つゝ
作せらるゝ為田沼主殿
律義なる人なれ共少し拙子
地遠く出中せ之政宗此時
此文を以て

ゝ邪
内府公とは年久しく
御入魂之今文上方へ手力を
尽せる之を
於て此時方はべし也田沼
三日逗留のうち毎朝少しも
怠なく田沼主殿に律義にて
知も政宗と対面
くいつゝ此時うる被され

内府公の御心底を委細よ中
屋敷なりの中に結士まぐ
れ〳〵一味同心くしの中に
候く政宗を起長結士残り
ぜ呼出て中渡されなりの
節行倉徒中 長度同治 伊
達安房同姓中安藤 里見 東国
なりこと〳〵 内府公の

御時方之中を時〳〵御国元
を強ふ以今より加して
内府公の以下知を書れ心底
をいなぐ中へきなりのもび
政宗度中途出られく合戦を結
毒用なり尤も伊達家お頂け
らるべきなれあ〳〵といへども
戦ひの節頂れ〳〵有て評判

等是なる時を上方一戦の陳り
ともなり中へ参るべきなりとぞ
宮手此儀こと意外なりて
とのゝ事とのゝ政宗哭く
大きれば此ところより三日路
退ぞくるゆいふもはなしく
なぞることゆされもだ鴻田
主きく此度　内府公の内

下知乃ごとく相守らるに於て
も上杉家縁ゞ行頂きとぐく
く政宗度へ行らるべきとの夏
なりと堅くく約束なるの儀も
鴻田常くく律義ゆして其事
お遠なるき故奥州出発之しい
見ふ係くなり後れ芝沼城政
宗に南部と私の合戦有故

今津領を甫生家に下されたり
金〻給ちと変じ〻なりしかども
いつゝざるなり

冥加大軍尾州清洲に名陣
村越庵助　上使の事
英庵雪斎御清村弥名参の事
弘治壹長久年八月十三日冥加

の大軍尾州清洲の城に名陣
して人馬共を休めたり尤
も高塚の城主名毛之所之条
福束の城主威光武弘ぶ城
攻て直城を落ともいへ先直ち
に冥加大軍を見くに大きに
驚き逃るれば唯大軍むる
〻毛〻なるに斗りこれ所

清洲の大軍は大事と思ひて
内府公の御出馬なる故お待ち受
その中を抜ける而
徳川家より村越茂助に御使ひ
として結城の軍勢を頼
申越 御心底の忝く
城委細手作書にされより村越
茂助は日夜奮怒手負数多
此度の御使ひを扶け忠せと
結人中合ね新て村越茂助に
尾張清洲手城 先井伊兵部
少輔直政 本多中務太輔忠勝
の両人に封面して委細を中
述べ手切の軍勢を頼ぶ
井伊 本多は是を聞
今この時を大事とせ

敵を欺くを以て肝要とす人々の心ゝ
隨分色を変じ味方に働く次
第一之を以て度々報
の法大将へ上使として差
登り左軍党と為らるる所
之報に御軍代として加藤の
事をば御関へ差れ候ぬ支

るりとして働用意して相意
を指へ其外菓子等近元之人
衆に出来さて翌日清洲の
城に諸大名集めて列座井
伊直政 幸長勝の家人を
執村を同じして出る所勝
信の時宜も形く上座つき
九月廿日に幸忠人数維一人

不礼を咎むる人もなく叔材越
後守中務大輔氏房を表彰大将
ゝ左陣の心労をはらゝねば
有て来りを待され沛菓子を
下さるゝ迄そもゝゝ上杉源
氏もゝゝ初の工作あるゝ
陣ゝ源家を中さる時ゝ
福島正則進て出ゝ中されゝ

所上使ゝゝ源ゝゝ
内府公所出ゝる氏政法ゝ夏
近隣知己源ゝ何中ゝの
見ゝ百ゝ所延日お知りや
聞ゝゝゝと有ゝば井伊を
本多も又村越ゝ沢もゝ
ゝや云ゝゝて手ゝ汗を握ゝ
結大将ゝ叔材を中ゝ長世ゝ

大勢こゝ尋ねんで村城を居丈
るゝ加く伝けゝね西く
れ引ねぐられ各くい妻子城
大坂に質こゝ立ゝ出斗
の山時うこゝ歌う集ものの狩も
後ら知ざる西へ年起ゆ
内府公ぐうゝゝと山出ること
あるべきや又歌も同前波年

大坂こゝなり何きとても手切レ
の山合戦是ゝられ格くい年遠
内府公伝古馬ゝべ〻ゝ考ま
西ゝの内こゝ義兵兎愛人あら
ぎ　内府公山上洛あつく
遅城天下紅べ〻ゝ考の美也
来ゝ此度伝仕ひゝ来りゝい
西ゝ山幸労ゝ引ね実ゝ山弱く

のはしを尺届けんが為なり
又おのゝ〳〵行ひ為こゝ寄相あり
んや点今の寄信を井伊 和多
ゞ用意こゝ
内府公はは
ゞ此ゝ
内府公の思て毛井伊 和多
ゞ名も有の信中られ
一度いゝけゝ又えゝりり

此村城日頃ゝ屋敷なれ其いゝ
ゝゝ理の南団金ゝもび後立す
ゝ者も形ゝ又返言ゝゝ人毛
ゝ一時ゝ福源左衛門の回
村城反の此ゝ日頃と遣ひ
ゝ者ゝ尺百之秋ゝ遅城寄場
ゝ尺合するかと
思ゝ百も能ゝ
内府公の
近日一秋を遣

中べきことなれども時平度重位
浪なる功の將なれバいやそよ
福鴻度を以て海の遊りまして
以表の面々ふ油断なく今
御使ひより目出度ありと
結人の思ひ又
内府公の思ひ百万も叶ひぬる
ものと来り物忠名代平御使を

中べきことなれども時平度重位
以度の御使ひの旗東畏まり
奉りは手先の波辱陣羽織
大旗を初め逆徒の者共を
一戦平討果ものべきのところ
なれど
ふ攻落さんとするも如何なれば
御籠先地尺まりて波辱の城

を攻石田を追討仕らんと評定
仕り候処に人々を波乗馬場攻落
して手切の軍仕り
御進發を待て更く石田殿討果
しゆべしと沸騰されつり
実や同じ山を更すとも道節
別きく流石乾坤の人之と
徒人長を感じ奥て村越

義助を江戸へ帰りて此趣きを
申上るお徒人此度の出仕ひい
徒も前代聞ありと参るを義助の回
く我も行れ忍者もるる又今
別も入る夏方〳〵我も如実おい
作分られまじと人度く忍
ず有有の作手中ありと参れ
実ケ原軍記二編巻の九終

池清

池清

関ケ原軍記武鑑巻之拾

目録

一 関東ノ諸將彼岸博責評定の事
并本多忠勝 加藤嘉明爭論の事
一 鴻巣左近主人石田ゝ諫言の事
并三成諫めを入れずして出勢大
恒博弟事

池清

関ヶ原軍記 貳篇巻之拾

関東方ハ端将波阜博責評定の事

并本多忠勝 加藤嘉明 阜論の事

去程ハ清洲ハてハ波阜博城責尽 迚三十六人の諸将并びに井伊直政 本多忠勝の麾下の

右後年

内府公の江戸代

ある故其下部おもの地侍を頼

お博中相勢の波辺大垣

を迎て竟漢して実説勢を結

今氏を先き大山の城を石川

彼中を主堀して本光小勢を

横義るを攻んと後せば不

北城を居る敵兵強集り中

さんを討引遣へく波辺堀を

責破るべきこと波辺落城

るべ大山城を寄武遣べしと

いふ物の長ふ同んしく

既を波辺北城攻よ和睦する

ふ此波辺に名堀ふて大河

茶平流色川の流れの船橋の

岩切るところなり

此節福鴻正則進み出るべ中い
川上を来り向の屋敷時に井
伊直政の曰く福鴻度を先陣
のものなれば徒人海を渡べ
きや迅き迅き四方に順行こそ
新筑前守川下尾城の渡り
をなすべきでは計るべきて
福鴻度渡べし又川上

の渡りは池田どの山渡りあり
渡べしとなり是ハ徳川四郎
も理を伏せ左りとなりて
同人を去形ぐ軍此初なり
い掛手此なるべきなりと
いへ手敵を振捨べしと
一同出立手極まりて江渡の
見なりへむかんくるる山軍

代として中務大輔忠勝先陣に
三左衛門輝政続ひく左京大
夫豊臣阿波守忠能其外有馬
松平　桑山一孝　遠藤　金森
寺澤等都合二万二千余騎にて
弦向に又川下尾張の国へ
むかへん〳〵に井伊兵部
少輔直政城陣軍代として福嶋
正則先陣に門続ひく細川
忠興　黒田長政　加藤嘉明　藤
堂高虎　田中吉政　筒
井　京極高知　部合其勢凡万
九千二百余騎にて此時池田輝
政中さんなるに家康　擬手とさへ
ゆるし敵兵出合ざる支もやる
んと緩心なることを附直政の

いろく夫こそ他人のうそしれ
実来の為をはかるひなら行方
をもいるるの変出井伊本
多も寵臣ふこそいてしいなを
といふよろく輝政を同んなり
又氏郎中務大輔中さるい波
阜城を近所大垣の城有て
うろ老をさきべきんが只一時

攻手出べしと中さるに氏郎
武雲は古老といふを長壁伝
る加藤左馬之丞あり
故に前明をこそ中さるい
いやく波阜城を一時奪ふ
加るまじきとうり軍始まりて
大日向の藩城をこそるり
初度の敵を根小屋を一意

しうんゝ大方を扱ひて
加ゝ退去せべしといふ中勢
の四くゝ方に隊を分ちゝく
好まざる事ゝ限り唯打破りて
去てべきゝ何ゝの事ゝ
はべきを怪て一時奇といふ
るゝ所ゝにて 内府公
沛軍代ゝゝく秋信を中さ

ゝるゝのゝれ秋信の年も中手
ふる迄武蔵の者ゝ云ゝゝ
赤唯ゝ解け軍を考きだや
ゝるゝに波阜の城ゝ三拾万石
金乃秀信ゝ孫子信忠の嫡
孫ゝて武彼慶ゝゝゝの
ゝ一万金人の籠城して北敵ゝ
望ゝゝり黄し 横正歳ゝ渡ゝ

八百余人にて八拾万の大軍なれ
ども、さうと雖、武者かゝる事をも
さらに辛忍れ御軍代られとい
ふ本多忠勝も武雪智謀とも
会利のごとく見れば怒
角一時責手きべきこと此城責を
却のゝ御形中せべて彼
見六ヶ敷云うちあんはしを

唯惣政 忠勝人の御責こと
打破り見せやきべきこと加度度
ゞ軍解して武雪を震うて
もそれい相手ゞ和手なんだ也
又此城攻手に入ゝざる構の時
なり 秀信今秀信拾万こと籠る
ともも秀信のめうるを攻落も
御行るゞの事れきべきや加

藤度ちを手袋に入らち
中と嘶第の大馬命大ひ力情り
寄情第ら布を爲ゞ廣ち邦出
物足せんと立る中務ち捕を
大吉にあゝけうぬ加度の
ち張ゞ尚時日本こ此忠勝と勝
頁ち年ちうん りのを笑へ迎
例まけりし石の大鉢ち中ホ

ち〻大ち刀を打げんち
次時ち度堂高虎紹より彼
石の大鉢をちんと取り此ち
めん〻大馬命手足見して
若年ちちも中務ち捕ち
内府公の御軍代ちて法ねち
日後に成ての邦ちりと和歌を入
ち抜れた井伊直政とち

一時衆と中なく騒て一変し
たりけるに
鴻左を主人石田と称して
兵三千許籠りて用ひずして古野
大垣城へ急ぎる事
同く石田治部少輔三成を蒙長
久年八月廿日伯耆和山へ帰陣同く
八日先陣の軍勢出るを見て一
鴻左衛門生備中 幸兵庫
高那城中ホ同く九日石田三成
出立なり彼て治部少輔へ注進
へ軍勢地弼りて大垣へ入陣
同く十又日三成も大垣城中へ
惟吳子爲の鴻左近これを討
武雪援世平院なり斯く

関東勢い波身博士攻んとせし後
く石田ゲ加勢川隈左る所 桂京
表右衆つ赤三千余騎こ陽誘き
山手搦手又波身秀信を元
来実来悪顔つ人ありしかく
色目百度 木造等建て陣言
ちるらいく左時石 赤墨等れ
出陣人間こと訳くこ訳こく

人秀信地勢
ありこれを結解を石田方より
取りしに有るり
云書ふ田くあるむ徳言関
領セこの人間ヒづれ知有
く生死を言せ此語のど
くるり寄新光 慈薩ひど
さい別して 写言西白こ

ぜ書鳥獣のごとくにして
犬のごとくちりれを結人見
城果めむを人此を似
を時といへども海辺の時人
間の用ものを立ぜして後世
人の志似を歳又学此之先
此を為者拾をつぐを
弟くしきめへ人を捕へ

られ籠くへ入ふる古奇年
多為此虎の命を
ふるもの牙を降り
ふるもの皮のあるゆ名
といつごとく虎を牛馬の
ばくちくらべ何世猫く
六ケ畜虎を捕へんやこを
ふくへ年能来皮を拾

世間に金銀財宝を貪り
て教さとれば悪しみあり
是全く重宝を持て有之
人只是づつれ共智恵なく
当れ義手のるが如く身
の能きが富まず人の勝
利根立こそ身を滅ぼ能く
考へ見るべきなり平生
て人の所
以利根ぶて知別ぶくい
必ず勝ぶ侵奸の身地
富貴唯常の利根を保
く和平形にぶくく
人の智をそるうんで強ぶ
時を見れば違る事
なれば利根なきい人只

光一の底なりとおもはべ東
の世の国三教も皆如く
なり其智なりせば牙城
を破るべきなりいかなる愛なりり
如あるべきなり智有て
結構城堀畢一壹して
邪正を分てこれいう斗りの人
の見をもて牙城を破よ

ほろぶるやうなる愚なる
らば邪をもつてもつて古今国
の義信四姫の者なりとて
結人を殺りも大名をして
永く国おしるべきに秘牙
城利根こ雪をとなる
人をあり志ん者の仏
愚愛と斗りいかさま君愛

なり既に古国他異の武士
以遠国に隠れ居くもりて忘却
せざるい又九郎とやらん
強りきいくども天命なる
ところい是人力の及ざ
る業なりしく石田を
智恵ありて防ぐ害ふ如
しきいふ為古近隣猛ク

強めを用ひられ俗へ
利根をもてるといふ尾
州石田三成を調略お調へ
て徳川手配相陣佐和山より
出陣い慶長五年八月九日と
相定めりこのせり為古近
徳川にして八月九日い大勝日なり
お陣い大ひに手柄を賞れへ

行く廊下にてなり又軍陣
も禁ぜる大家知日之朝日九日
十七日 ホ日 ちや橋にてなり浜宮日
すい先手い出勝をるともたる
本をいぐ出をきにてなり曲て
明日ホ迎しぬ又夫手急ども
敵名い見へぐらく急ぐる
古陳なりと陣わたり

凡軍法にて日夜時夜ありい
方角古地を大ひ手去橋ひ
あり名將 良将ども左手
用ゆる事なり
東照宮大坂陣のせり
竜の潮を大ひ手きひ
ものれい聖徳太子氏絵
ホ持馬引馬ともりく陣

らべて古代の事なれ
用ひ来りし船にて用ひべき変い
必ず用ひ給ふ元を軍用
その日元を大ひに用ゆる
なり先年重人のいくさ
地出さふ用ひざる事変い
正和と和定め船をゆる
まれて禁ぜる日の大事也

うれ船にて物を押へ
ぜ磨の日蝦夷に南日
を見くそのあれ
それ船の如しと考へべし
石田三成を戈船敗りて
これを用ひ給ふ軍令
根綱くさを何とて日ごと
を見くらぶ船や船にて

遠ひろう去れば義経の歌

時とは日に歌ば絶えんば
味方よりは味方に敵を
方角知る
雲形を孫ぜんあり戦うひと
初むるせんの方角にてある
ぞまるれ日夜を用ゆるふ

ぞといへども義経の
方角をいろいろ代子神ある
中なり思ひて日夜のうを
妻神よりうちもちひ
うまずに石田どのの大概の
智はるもうるれを利根にて
人のいうをを用ひうるば行
も孫義なり氏なりいか市

[illegible]
又止へき子あ[illegible]ん進ぜと扨へ
く出陣しけり八月廿日出[illegible]
夫一の先陣を[illegible]左近[illegible]
嫡子新吉郎武千三百余人
二陣を蒲生彦中并びに嫡子
大鉾子又百騎人夫二陣を[illegible]
[illegible]中　蒲生庫　大山伯耆

大鉾左衛三千余人也四陣を
蒔田伯耆　森伯耆　小川平
左衛門　三田村織部子又百余人
出立して益井に[illegible]を渡左
近が軍配布一騎さきをかける
大将三郎を八月九日出立彦根
明け進度縫度物　横山豊物豫
奉行を森川九左衛　蒲川左門

鉄炮ばらへ那須大系の砲
撃平三郎　大鳴五大系の
子嶮平郎　井口清大夫の援
並助　百姓　番籠弓隼人
蓑田作蔵　子源郎紀伊下野
壱百二子余人　番援合せて二万
余人　佐和山城を立る程の実
や大勢の石田と見へ又

佐和山の城乃留守居父石田
隠岐守嘗宇多下野守並び子
三郎ば嫡子隼人正同く会津変
隠者頭　山田土佐　梅口大清
赤雲左衛門　川瀬蔵助又宮内
東雲新七軍配者として橋蔵
佐三郎清別へ　十人
城を作度度清ば同性の老長

伊度伊織同く新母の妻人滝龍
おゝで逃ひ来りて大垣の城中
を根尾谷鷲巣に自刃を中
のがるるのせつ浅郎が博ゞ勢ひ
い偏へ年西西まるい実来
内府公の御威光のごとく三成
大垣の城へ入る徒所を家配
まるゝ波乗中洞を秀信味方ふ

おゝ寄せるこの加勢として
川御方馬奏 桃原表右衛門城
表大将として おゝ使ものの方
年い攻城年三郎 寺沢四郎
を来 白井孫左衛門 寺沢四郎
として三千余人を波乗城に
差つく陽龍 ちる山の岩城おゝ
ちゝむ庵生徒中

武多金人物さき様へ鞭及荒
神河曲へ遣しうり是い石田三
成が安危の鞭うひと成る時平
いくさの掛引はべしそのう
ち徳れども諸軍意ぎび後
く蒲生い陽陣平及び毒刺
徒も石田さきを刃鳴友を伏貫
一乃先陣として大垣こ左陣

本庄平兵衛殿此度は様躬と
成り諸方へ下知伝へ
[illegible]

池清

池清

関ヶ原軍記二篇毒の抜書

池清